極楽って　どんなところ？

——再会を願って

●目次●

はじめに——あの人は〝天国〟に!?

1　死んだらどこへ

①「死んだら終わり」——本当に、そう言えますか？……3

②〝六つのあの世〟をこえて……7

2　極楽って、どんなところ？

①阿弥陀さまが用意してくれた国……11

②遠くて近い極楽浄土……13

③極楽のすがた……14

④再会を願って……15

3　祈りを

①どんなつらさも、阿弥陀さまにおあずけして……20

②「わたしも、いずれ……」……22

はじめに――あの人は〝天国〟に!?

「あぁ～、極楽、極楽」

昭和の時代、お風呂で聞かれた定番ともいえるつぶやき。ドラマなどでもセリフとしてよく耳にしたものです。疲れが取れる、ホッとする、そんな実感のこもった一言ですね。それをほとんど耳にしなくなったのは、いつの頃からでしょうか。いまや、子どもたちの耳にはほとんど届いていないかもしれません。

一方で、有名人の葬儀などを報じるテレビ番組を見ていると、仏式の葬儀なのに、コメンテーターが「安らかに天国でお休みください」と言葉を添えたり、葬儀や法事の喪主(施主)が挨拶で、「父も天国で喜んでいると思います」と言ったりすることがあります。でも……ちょっと、おかしいですよね。仏式の葬儀でお送りしたのに。赴(おもむ)く先は「天国」なので

しょうか。

長い間、日本人（仏教徒）にとって後生（死んでから後の世界）は「地獄」と「極楽」と思い浮かべていました。その「極楽」がいつの間にか「天国」に馴染んでしまったようです。もっとも、「天国」と言ってはいても、キリスト教などで説かれる〝神の国〟のことではなく、ただ言葉の使いやすさからのようですが。あなたも「極楽」のことを、いつのまにか「天国」と言い換えてはいませんか？

お念仏をとなえる私たちが往くのは「天国」ではありません、**〝阿弥陀さまの世界〟「極楽浄土」**です。この世でお念仏の教えと出会ったのは、私たちと阿弥陀さまとの間にそれだけのご縁があった証です。私たちは、その極楽浄土へ迎えていただくのですから、お間違えのないように！

では、その極楽浄土、どんなところなのかを見ていくことにいたしましょう。

1　死んだらどこへ

①「死んだら終わり」――本当に、そう言えますか？

日本人の2人に1人は癌（がん）で亡くなる時代。「○○癌の第○ステージです。このまま治療をしなければ、余命○カ月と思われます」といった具合に、お医者さんもはっきりと告知するようになりました。日本は平均寿命が世界で1、2位を争う長寿国ですが、医療が発達し、生活が豊かになり、たとえ長寿が珍しくなくなっても、命は一つであり、いずれは死を迎えることに何ら変わりはありません。早い遅いの違いはあっても、みんな同じく致死率は100パーセントです。

ふだんは忘れている、あるいは意図的に遠ざけている、けれども必ずやってくる「死」について、少し考えてみましょう。

人にはそれぞれの人生があるように、最期の迎え方もさまざまです。闘病の末に亡くなる方、突然の発作で、あるいは事故や天災に巻き込まれて、老衰で……。男女を問わず、年齢の順序とは関係なく、時や場所を選ばずに死は訪れます。

病気や怪我などにより、余命の宣告を受けた時、多くの思いが心を駆けめぐります。

「どうして自分がこんな目に遭うのだろう。真面目に生きてきたはずなのに」

「もっと健康に気をつけていれば、こうはならなかったかも……」

「自分がいなくなったら、残った家族はどうなるだろう」

他人を羨んでも、後悔しても、寿命は私たちの思い通りになってはくれません。しかし「死ぬ」ことは、悪いことをした結果として受ける罰でも、生き方に不足があるから受けるものでも、まして人生を否定されたわけでもありません。私たちは〝自分のもの〟だと思い、すっかり〝自分の力で〟生きているつもりになっていますが、命は授かりものであり、さまざまな要因、多くのご縁に生かされている存在です。今日、このように生きていることは、決して偶然でも当たり前のことでもありません。病気・事故・災害等々、思いもよらないことで突然途切れてしまう、実に脆く儚いものなのです。

私たちは、誰もが「死ぬ」ことと知っていても、〝自分自身の死〟〝大切な人の死〟など、考えたくはありませんね。常に悩んでいたらノイローゼになってしま